

所属	言語文化研究科 英語・英語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	祁答院 恵古	指導教員 (主査)	岡 秀夫

論文題目	これからの小学校英語教育 — 10 年間の実践をもとに
------	-----------------------------

本文概要

小学校における外国語教育は昭和 60 年代からの課題であり、20 年間の経過を経て、平成 20 年度の「外国語活動」の新設につながった。筆者はこの 10 年間、外国語活動開始学年の異なる A 区と N 区に、英語教育アドバイザーとして関わっている。A 区は、小学校の教育課程に「英語科」を位置づけ、平成 16 年度から区内すべての小学校で、第 1 学年から第 6 学年まで週一回、英語の授業を実施している。一方、N 区は平成 22 年度より第 5 学年、第 6 学年の 2 年間、“Hi, friends! 1, 2” を教材に、文部科学省の示す外国語活動を実施している。N 区の場合、第 1 学年から第 4 学年までの 4 年間に英語授業を実施していない。この開始年齢の違いによって英語学習にどのような「違い」が生じているのであろうか。「コミュニケーション能力の素地を養う」ための時間は十分に確保されるのだろうか。

本修論では、A 区と N 区の英語授業の展開と実践の記録を比較分析し、その中で特に指導計画、使用教材、指導方法について議論を深め、それを通して、外国語活動開始年齢（学年）の違いによって第 6 学年児童の 4 技能到達点、英語学習に対する態度がどのように違ってくるのかを見極めることが目的である。それに基づき、小学校児童にふさわしい外国語としての英語授業を検討したい。

A 区の 6 年間シラバスは N 区の “Hi, friends! 1, 2” の単元を全て網羅している。扱う単元が豊富で異文化体験を実践していることも特徴である。認知度の発達、社会性の発達に沿って、各学年に相応しい内容を扱いながら、絵本、歌などの教材選び、活動内容を工夫するなど、丁寧にスムーズにつなげることができる。“Hi, friends! 1, 2” では “家族” “体” “暮らし” の単元が扱われていない。これは A 区と N 区の学習内容の大きな違いである。「言語」を学習する場合、生活に密着した語彙を身につけていくことが子供にとっては自然であり楽である。しかし、2 年間で行われる英語活動は時間的な余裕がなく、機能シラバス中心の “Hi, friends!” では単元構成に限りがある。

A 区、N 区共に毎授業後に、その日の授業に対する達成度、理解度、態度を見るために「振り返りシート」を児童に記入させている。それに加えて 3 時間目か 4 時間目にはワークシートや記入式の活動を設定し評価の一つに活用している。このワークシートは周りの友達と speaking 活動をしながら記入していくものである。writing を通して英語の達成度、態度の積極性を見ることができる。今回、英語授業開始 6 年目の A 区 6 年生 60 人と、2 年目の N 区 6 年生 80 人のパフォーマンスの相違、特に態度、4 技能習得度を比較、分析するため、平成 27 年 10 月に同じ指導計画で授業を試みた。

実践授業を分析した結果、listening/ speaking/ reading の分野、動機づけや異文化理解などの点で、A 区の 6 年生に優位性が見られた。その一方で、writing に関しては学習到達度にそれ程違いがなかった。特に認知的に発達している高学年で開始した N 区の 6 年生の場合、‘書くこと’ はむしろ効率的に習熟して行くことが分かった点は興味深い。

小学校英語のシラバスを Krashen (1978) の提唱する「自然な習得順序」 (natural order) に沿って作成するならば、第一言語と同じように第二言語としての英語教育はスムーズに行くのではないだろうか。さらに、日本のような EFL 環境で第二言語習得に関する年齢要因を克服するためには、指導者の英語力とスキル、授業力が大切な要因であり、この意味において教員養成が重要なテーマとなる。小学校英語教育の役割は、本時の目標表現を使い合う過程での子供の気づきを促すことであり、それを通して子供たちに学習に対する積極的な態度が育ち、異文化コミュニケーションへの素地が生まれよう。